家族についてじっくり考えるの巻

家族って何だろう？ 真剣に考える時がきたんですね。

近年の核家族化や女性の社会参加などにより、〝家族〟の機能が変化してきたと言われています。国際連合は一九九四年を「国際家族年」と定め、これを受けて各国で家族・家庭の大切さを訴える取組みが実践されています。今回は、県が企業や地域を対象に行っている「出前家庭教育講座」と、国際家族年記念イベントの「ファミリーフェスティバル」を立迫なぎささん（芦北郡芦北町）と松下玲子さん（阿蘇郡一の宮町）にリポートしていただきます。

「分かっているはずなのに、子どもの性長にはつい目をそらしてしまうんですよね」

●出前家庭教育講座についてのお問い合わせ
熊本県教育庁社会教育課
☎(096)381-9214

「働く女性の悩みはやっぱり〝子育て〟だそうです」左から立迫さん、松下さん

■職場で子どもの性教育を学ぶ！
―出前家庭教育講座を聴講して

働いているお母さん方には子育てや共稼ぎから起こる悩みを持っている方が多いと聞きますが、働いていると講演会や相談に行く機会もなかなかありません。

そこで、ふだん家庭教育についての学習機会を持ちにくい方々のために、県が地域や企業などへ講師を派遣する『出前家庭教育講座』を実施していると聞き、私たちはこの講座を取り入れられた球磨郡錦町のNEC工場を訪ねてみました。

同工場の全従業員の半数以上が女性。そのうち、既婚者が六十％ということで、ここでも、子育てに関する悩みが多いようです。「働く女性」を目指す私も、子どもができたら仕事と育児の両立ができるのか不安があります。

今日は、会社内だけではなく、地域にも参加を呼び掛けての開催です。演題は「子どもの性的成長と家庭の役割」。性教育コンサルタント宇野サダさんのお話です。仕事を終えたばかりで疲れているにもかかわらず、皆さん、真剣な表情で講演に耳を傾けています。お父さんの姿も目立ちます。戸惑いがちな家庭での性教育やしつけについて、また、中高年期の夫婦のあり方にまで話が及びました。講演後には聴講者からの積極的な質問がみられました。

講座終了後のアンケートには「仕事の都合でなかなか講演会に参加できない。会社の中で勉強する機会が得られてありがたい」「性教育に自信と勇気がついた」という感想が寄せられていました。私も、書物では得られない実践的な子育て論を学ぶことができました。

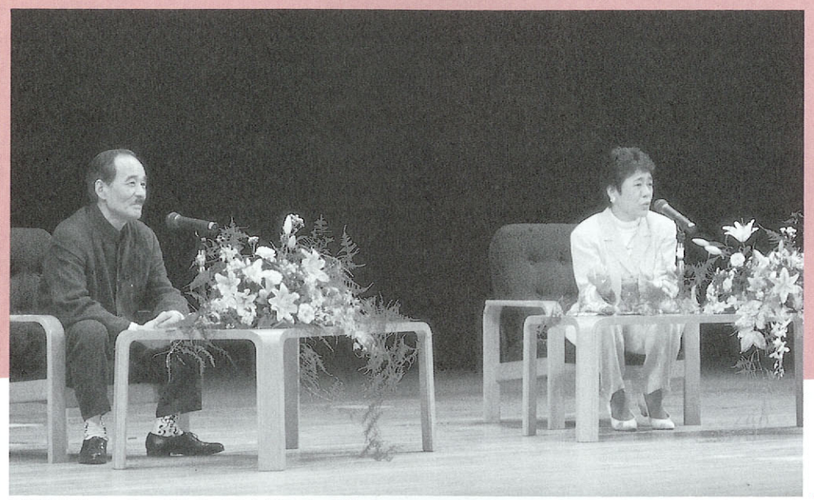
女性の社会参加が増えてきた現在こそ、家庭教育や家族のあり方を見つめ直す必要があるようです。企業もこういう機会を積極的に取り入れるべきだと感じました。企業内教育の場が増えれば、父親の子育て参加の機会が広がることにもなるでしょう。〝家族の絆〟がさらに深まる社会になって欲しいものです。

時代はどのように変わっても、家族の果たす役割は変わってほしくはありません。一人ひとりの喜び、悲しみなどを感じ合い、助け合ってこそ家族ではないでしょうか。

（芦北郡芦北町　立迫なぎさ）

子どもの目を通した家族の素顔が垣間見えた〝わいわいトーク〟

親子連れで賑わいました



神津家の楽しいエピソードも飛びだした〝親子トーク〟

■家族とは？ 子どもが語り皆が考えた
―ファミリーフェスティバルに参加

ドン・ドン・ドーンと太鼓の響きとともに、ステージには四十人の保育園児の勇者たちが並んでいます。ちびっこたちの表情は豊かでイキイキとしています。何日もかかっての練習の成果が客席の私たちに伝わってきます。

社会の基本となる家族・家庭の大切さや役割を、今一度見つめ直す機会として、八月二十五日、県立劇場で「国際家族年記念ファミリーフェスティバル」が開演されました。

「子ども太鼓」の後のぬいぐるみ人形劇「恐竜モックス」の舞台では、かわいい動物のぬいぐるみたちが、ステージを駆け巡り、子どもたちの夢を誘います。

第二部は、小学四～六年生、四十五人のお友達が、鈴木健二県立劇場館長をアドバイザーに迎えての「わいわいトーク・ぼくの家族わたしの家庭」です。まず、子どもたちに「なぜ学校に行くのか？」の質問に〝しっかり勉強したいから〟〝友達をたくさんつくりたいから〟などの答が返ってきます。鈴木館長に促されて、女の子は花の絵、男の子は抽象的な絵を黒板に描きました。大抵の女の子が命あるものを描き、男の子は存在感のあるものを描くのだそうです。そのような子どもたちの個性を伸ばすのも家族の役目であることを館長は強調されます。

最後に「今、家族を考える」というテーマで、神津善行さん、カンナさん親子による率直なトークが交わされました。家族とは、夫婦のあり方とは、子育て、教育、能力、学歴などなど…。親子の対話を聞きながら、どこの親も子どものためによい環境づくりをし、方向づけをしようと一生懸命なんだということを感じました。

夫婦だけの家族、三世代同居の家族。様々な形態の中で、互いが我慢し譲り合いながら、時には主張し合いながら共に生活していくことが、家族の本来の姿だと思います。国際家族年のスローガン「家族からはじまる小さなデモクラシー」もあるように、このことがさらには、国と国、民族と民族の平和へつながる一歩だということを再度認識しました。実りある一日に感謝しながら会場を後にしました。

（阿蘇郡一の宮町　松下玲子）